

1 研究主題について

(1) 研究主題

仲間と共に運動の楽しさや喜びを味わう体育授業の創造
～ネット型の授業を通して～

(2) 主題設定の理由

岐阜県小体研、中津川市市教研の研究テーマを受けて、この主題を設定した。体育の最大の目標である「生涯にわたる健康の保持増進」や「豊かなスポーツライフ」のために、小学校の体育では、「運動は楽しい」という経験をさせていくことが一番大切である。その「楽しい」とは、児童がもつ「うまくなりたい」「勝ちたい」という思いと、それをもちながら体育の授業を行うことで得られる「できないことができるようになった」という喜びからなると考える。そういう思いをもたせられる授業を行うためにはどうしたらよいかを研究していく。

(3) 目指す児童の姿

- ・ゲームを通して楽しく運動しながら運動技能、運動感覚を身につけられる児童

2 研究内容について

(1) 研究仮説

- ・技能の発達段階を明確にし、児童の実態を踏まえた単元指導計画を作成することで楽しく運動技能を高めることができる。
- ・つきたい力を明確にし、場の設定やルールを工夫することで技能を高めることができる。

(2) 研究内容

- ・研究内容1 発達段階と技能の系統性を意識した単元指導計画の工夫
- ・研究内容2 発達段階を踏まえた技能を高めるための場の設定とルールの工夫

(3) 研究の具体的方途

- ・研究内容1に対して 技能の系統性の整理とそれを踏まえた単元指導計画の作成
- ・研究内容2に対して 児童の実態からつきたい力に合った場とルールの作成

3 実践事例

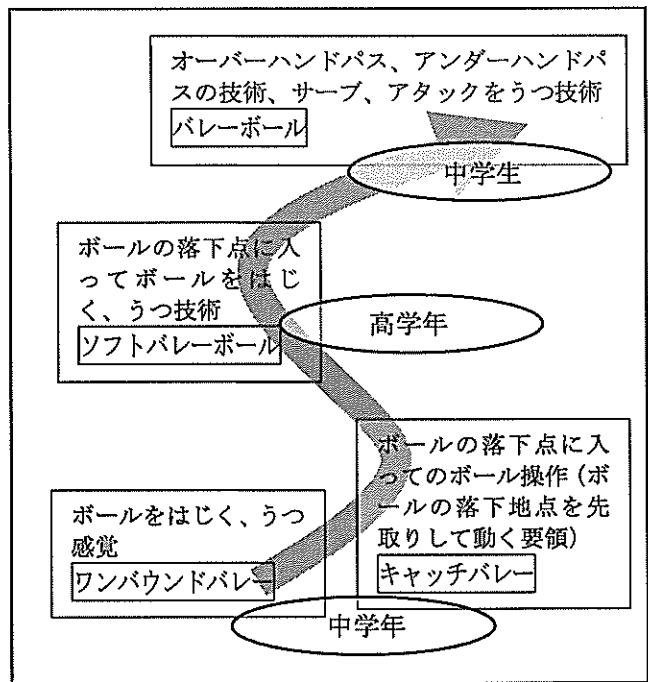
4年生「ソフトバレーボール」

男子：18名 女子19名 計37名（内特別支援学級4名）

【研究内容1 発達段階と技能の系統性を意識した単元指導計画の工夫】

単元指導計画を作成するために、まず考えたのは、ネット型ゲームの楽しさである。「チームで連携して相手コートにボールを返しラリーを続けたり、意図的な攻撃で得点をとったりすること」が「楽しさ」であると考え、ゲームを通して活動を行う中でみんながその楽しさに触れられるようにしようと考えた。

次に、9年間の系統を考えながらネット型（バレーボール）に関する個人技能の発達について考えた。（右図）小学校中学年はその最初の段階であるため、ボールをはじく・うつ感覚、ボールの落下点に入ってボール操作ができることを重点にしながら、個人技能を高めていけるように単元を構成した。（資料参照）



【研究内容2 発達段階を踏まえた技能を高めるための場の設定とルールの工夫】

(1) 場の設定とルールの工夫

研究内容1に示した通り、ネット型ゲームの楽しさを感じさせ、さらにボールをはじく、うつ感覚、ボールの落下点に素早く入ることができる授業にするために、以下のような場の設定を行った。

<p><場の設定></p> <ul style="list-style-type: none"> * 14m × 5m (障地7m × 5m) → 児童の実態によって変更あり → 2人用に点線準備 (7m × 3m) <ul style="list-style-type: none"> * 4コート準備 * ネットの高さ170cm～175cm * ミニソフトバレーボール150g * 試合がないグループは練習用コートを使用 	<p><単元を通したルール></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 1チーム3～4人 (6～7人チームを2チームに分ける) ・ ゲーム (4分) - 1分移動 ・ サーブは相手が両手で投げ入れ (2回ミスしたら相手ボール) ・ 一人が連続でボールを触ってはいけない ・ タッチネットをしてはいけない ・ サーブ以外は投げ入れ返球はなし
	<p><児童の状況によって変わるルール></p> <ul style="list-style-type: none"> * オールキャッチ * 1本目キャッチ * 2本目キャッチ * キャッチなし

場の設定とルールの工夫の意図について説明する。

①人数 (6人グループを2つに分けた3人でゲーム)

一人一人が多くボールに触れられるゲーム環境を整えるため、6人グループを2つに分けて3人でゲームを行うことにした。

②コート数、コートの広さ（自陣7m×5m）

一度に多くの児童がゲームを行えるようにするために、簡易ネットを作成し、4つのコートを使用した。広さはバドミントンコート（7m×6m）よりも横幅を狭くし守るコートを小さくして、縦への広がりをもったゲームなることを期待した。合わせて、欠席者がいてもゲームが成立するように2人用のコートを準備した。

③ネットの高さ（170cm）

ネットの高さは、「ジャンプしなくても両手で返せる高さ」「ジャンプしながら両手で強く返せる高さ」を意識し、クラスの平均身長138cm+腕の長さ40cm-手のひらの長さ10cmと考え算出した。

④練習コートの作成

試合のできない児童が話し合ったり、話したことを試したりするための練習コートを作成した。

⑤ルールの工夫

今回の単元ではオールキャッチ、1本目キャッチ、2本目キャッチのルールを用意した。それぞれのルールで身につけさせたい技能は右のように考えた。児童の実態や技能の習得具合によって変化させられるようにした。

ルールの意図と身につけさせたい力

ルール	身につけさせたい力
オールキャッチ	ボールの下に素早く入る感覚 ボールを操作しない人の動き ボールを強く遠くにはじく技能
1本目キャッチ	ふわっと上がったボールをはじく技能
2本目キャッチ	相手から来たボールをはじく技能

(2) 場の設定とルールの工夫の効果

①人数（6人グループを2つに分けた3人でゲーム）

3人にすることでボールに関わる回数が多くなった。また、1本目にふれない人の動きが明確になった。そのため、相互援助活動もしやすくなった。

②コート数、コートの広さ（自陣7m×5m）

コートの幅を小さくすることで、ラリーを続けやすくなった。それは単純に守るべきコートが小さくなったからだと考えられる。それだけでなく、ラリーが続くようになった後、得点を取るためにボールを遠くへ返す、強く返すという様相が見られ始めた。横幅を小さくしたことで広がり縦へ限定され、遠くへ返っても何とかつなぐことができたり、返すことができたりしていた。より相手コートを狙う、あきらめずボールを追いかければ相手コートに返すことができると意識が積み重なってゲームの様相が高まっていった。

③ネットの高さ（170cm）

狙った通り両手で返す様相からジャンプして両手で返す、片手に変えより強く返そうとする様相が見られた。

しかし、個人差が大きくなるため、できる児童とできない児童の差が激しくなってしまう。また、「一本目のみキャッチ」のルールに変更した段階で170cmでもタイミングが合わないことが多くなってしまった。

④練習コートの作成

児童はゲームのない練習時間を利用してボールをもたない人の動きや前に出るタイミングなどを意欲的に学習できていた。また自分たちの課題をみつけ、それに基づいた練習を行っていたため、「主体的な学習」につながっていくと感じた。

⑤ルールの工夫

オールキャッチルールでは狙い通り、ボールの下に入る感覚やボールをもたない人の動きを確認できた。しかし、1本目キャッチになるとふわっと上がったボールを上にあげる技術やそれをはじいて打ち返す技術などでつまづきが多くみられ、2本目キャッチやキャッチなしルールまでたどり着くことができなかった。

4 成果と課題

【研究内容1に関わって】

- オールキャッチバレーからスタートしたことで、ゲームの様相の初期の段階「自分のコートに落とさない」が大幅に軽減され、「相手コートに返す」→「相手コートに落とす」の段階に発展することができ、ネット型本来の「楽しさ」を味わうことができた。
- ネット型の導入の段階で、ラリーの楽しさや意図的に得点を取る楽しさ、それをさせまいとする楽しさが味わえたことでネット型は楽しいと児童に思わせる単元にすることができた。
- ゲームの様相を追いすぎてしまい、技能の発達が狙いまで到達しなかった。

【研究内容2に関わって】

- コート数を多くすることで、ゲームから思考することや技術を習得する機会を多く与えることができた。
- コート大きさやネットの高さを工夫することで、うまくなる過程で必要な現象や考えさせたい事象を意図的に出させることができた。
- ネットの高さなどを固定してしまったため、ルール変更に伴ってラリーが続かなくなってしまった。
- 対人関係に不安をもつ児童や特別支援学級の児童などがゲームに参加することができなかった。

5 課題克服のための今後の方向

- ・ゲームの様相と技能の高まりのバランスを考えた単元指導計画を再考する必要がある。
- ・単元の中でゲームの中から児童の「うまくなりたい」という欲求を引き出し、個人技能を練習させる時間を位置づけることで、より高いレベルへの発展させるそれに加えて、単元の目指す姿をはっきりと児童が理解できるように説明することで、練習コートでの練習でさらに個人技術に磨きをかけようとする姿がみられるようにしていく必要がある。
- ・場の設定が単元を通して共通ではなく、1時間1時間変化させながら、児童の適度抵抗を探り、一番良い場の設定で活動させられるようにする必要がある。
- ・活動に参加できない児童や対人関係に不安をもっている児童に対する支援についても考慮に入れながら場の設定やルールなどを考えていく必要がある。
- ・技能を高めるのに有効な話し合いの方法や自分たちに合った作戦の立て方など相互援助活動の仕方を他単元や普段の生活を通して身につけていく必要がある。